トピックス

研究余話　OPENING DOORS

生体構造学講座　深井直実

ご存知の方も多いかと思いますが，私はここ奥羽大学にお世話になるまで，1992年からの16年間，米国ボストンのハーバード大学にて研究生活を送ってきました。

何がきっかけでボストンに，どうしてこんな長きに渡って，そしてこれからは？

東京医科歯科大学の医学部を昭和52年に卒業後，脳神経外科教室に入局して１年半たったころ，一回目の留学のチャンスが訪れました。医局から米国NIH（アメリカ国立衛生研究）に脳梗塞の研究員が派遣されており，２年の任期を終えて帰ってくるので，次の人選があったのです。私ともう一人の同期生が行きたいと意思表示をしました。二人とも入局したてで業績もなく，比較のしようがありません。そこでじゃんけんで決めるかという事になり，それでジャンケンポン。結果は私の負け。

最初の扉(Door)はジャンケンで閉じられ，行った同期生は実験脳浮腫の重要な仕事をやりとげました。

二回目のチャンスは，入局８年ほど経ち臨床がそして手術が面白くてしょうがなくなってきた時期にありました。最先端の技術で，当時日本にはほとんど導入されていなかった，血管内手術の習得です。ニューヨークで研修をしていた先輩から，来てみないかとのお誘いを受けたのです。ところが留学準備を始めた矢先，私自身が肝炎に罹患してしまい，この２番目の扉（Door）も閉じられてしまったのです。

私の代わりに行った後輩は，この分野の日本での草分けの一人となり，現在も大活躍しています。

三回目のチャンスは東京都老人医療センターに勤務していた時にありました。動脈硬化発生のメカニズムに興味を持ち，同じ敷地内にある老化研究のメッカである都老人総合研究所で臨床のかたわら，細胞レベルでの研究をしていたとき，とある先輩から細胞外マトリックスやるんだったらボストンのオルセン研究室に行ってみたらどうかと勧められたのです。彼の論文をいくつか読みました。使っているのが遺伝子組み換えとか分子生物学的手法で全く解らない。しかし面白そうだし，一つ応募してみるかという気になって手紙を書いた所，ポスドクとしての招聘を受けたのです。

周囲の先生方の推薦や後押しが招聘の大きな要因になったのは言うまでもありません。しかし私が応募したちょうどその時，ポジションの空きがありかつ人を雇う資金があったのも大きな幸運です。後に知った事ですが，同研究室には毎日世界中からポスドク希望の手紙が舞い込みます。いくら優秀な人でも空いたポジションがなければどうにもなりません。

このようにしてやっと３番目の扉（Door）が開いたのです。

私は自分の将来に対する計画性に乏しく，自分の今居る場所で全力を尽くすというのが主義です。ボストンでもその方針を貫きました。何事も一生懸命やると，さらに面白くなるものです。研究は面白いし，アメリカの生活も周囲の事にはあまり気を使わなくて済むのも気に入りました。またボストンは全米でもっとも大学の多い都市で，学問的刺激に富んでおり，さらにボストン交響楽団やボストン美術館に代表されるような分化に富み，かつ自然にも恵まれています。これらが16年もの滞在におよんだ理由です。

さて，今回の奥羽大学赴任が第４番目に開いた扉（Door）です。中に何が待っているのか見極めてゆきたいと思います。前途洋々たる若い学生さんや研究職員がいらっしゃる事は確かです。今回は私の方から彼等のために扉を用意する事もやっていかなくてはいけないでしょう。